
雨と傘。

鍵屋のカギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨と傘。

【Nコード】

N8873F

【作者名】

鍵屋のカギ

【あらすじ】

あの雨の日に出会った風景は……。

雨が降っていた。

その学生は男の働く古書店の軒先で雨に打たれていた。

紺色のブレザーの肩が濡れそぼって、大層重そうに見える。

奇妙なことにその学生の右手にはちゃんと傘が握られていて、しかしその傘は留め金をつけられたまま、使われた形跡がなかった。

こいつは何故傘を使わないのだろう……？

男は学生の握っている傘を見つめたまま、ずり落ちてきた紙袋を抱え直した。

そして今自分が差している傘を見上げてみた。

軒先の人物のものとさほど差のない、何処にでもあるコンビニエンスストアのビニール傘越しに、曇天どんてんから降り続ける雨が筋になって流れ落ちる。

まだ雨は止みそうにない。

声を掛けてみるか？

口を開きかけたその時、古書店の扉が開いた。主人がひよつこりと姿を現す。

「芦名君、煙草たばこは在ったかい。」

「はい、ちゃんと買って来ました。」

主人の手招きに男は店の中に入る。

湿気を嫌う古書ばかりの店奥に傘は持ち込めない。玄関外に陶器の傘立てがあり、男はすぐに傘を閉じると再び扉を開けた。いつの間にか軒先の学生は居なくなっていた。

翌日の午後四時半過ぎ。雨が降り始めた。

少し前まで青かった空が鈍色にびいろの雲に覆われていく。

古書店の帳場に頬杖をつき、男は窓硝子がらすを滑り落ちる雨滴うてきを見るとはなしにぼんやりと眺めていた。

窓の外のすぐ傍らで今年主人が鉢に植えた白い秋桜こすもすが、雨の重さに耐えられずに頭こぶすを垂れている。

その姿に何故か昨日の学生を思い起こした。

男の高校時代に着ていたものと似たブレザー。取り立てて特徴のないそのブレザーに懐かしさとほろ苦さが込み上げる。

思春期特有の精神不安定に振り回された学生時代。興奮と気落ちとを繰り返し、興奮すれば当たり構わず暴れまわった。小さなこと一つひとつが気に障り、特に雨の日が嫌いだった。雨というそれだけでイラつき、傘で電柱や縁石を殴りつけていた。

そして骨が折れて使えない傘をぶら下げ、雨に打たれながら帰ったものだった。

ああ、そうか……。

昨日の学生も骨の折れた傘をぶら下げていたのかもしれない。

雨が益々強くなってきた。ガタガタと窓が鳴る。

扉の磨硝子すりがらすに影が差した。だが客が入ってくる様子はない。

男は立ち上がり、扉を開けた。

軒先で雨宿りをしている人物がいる。

それは昨日の学生だった。

今日もまた留め金がついたままの傘を右手に握っている。

「なあ、傘が使えないのか？」

「……あんたに関係ないだろ。」

学生のぶっきらぼうな物言いに昔の自分が重なり小さく男は笑った。

「ちょっと待ってな、傘を貸してやるよ。」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8873f/>

雨と傘。

2010年12月25日15時11分発行